

# 日本語における音声表現言語と文章表現言語の相違

## Study of the Japanese language

Jianmin YU \*

In the process of people's communication, different objects and environment to exchange information will lead to different contents and purposes, Which is inevitably and differently characterized in the choice and use of the language materials. The language expressive system that is composed by different language features is called "language style".

Different language styles will have different use and arrangement in vocabulary, grammar, rhetoric and composition. This paper makes a comparison of different language styles to study their features in the Japanese language.

### 一、まえがき

中国人から見た日本語の使い方に関して、特に、音声表現言語と文章表現言語、どの特徴について、事例を挙げながら検討することを目的とした。

### 二、文体の差違

日本語の文体は、大体2種類に分かれる。音声表現言語と文章表現言語のスタイルである。その相違点について、述べてみよう。

#### (一) 音声表現言語

音声表現言語の機能は、多様で、内容は、豊富である。応用範囲は、相当に広範囲である。そして、社会の多く面に関係している。大体以下のように分類されている。

- (1)、日常談話（一般的な話し合い、通信、買い物、旅行、娯楽、医療、運動などである。）
- (2)、講演（宣伝、煽動、報告、授業、座談会、対話的な文章などである。）
- (3)、事務的会談（条約、契約、貿易及びいろいろな技術的対話と会議等である）

以上の分類から、日常会話は、純粋な音声表現言語と考えてよい。その特徴は、次のようである。

1、**広範性と通用性。** このような対話の題材は相当幅が広い。語彙の使い方は、ほとんど音声表現言語の語彙である。日常生活語彙、及び具体的語彙は、通用語彙である。その範囲は、方

---

\* 教養部

言の言い方、流行や、新しい社会現象の表現など、そして、一般的な科学技術語彙、成語、慣用語などに及ぶ。しかしながら抽象的な語彙と、文章の語彙、専門用語など、人々が、熟知していない外来語などの使い方には、限界がある。

2、生き生きとしている。このような対話は、相互に折り合って、早い反応と、感情が、豊かであるなど、積極的に、感情色と、表現の語彙を使う。例えば、「御主人、御世話、笑う、泣く、悦ぶ悲しい、楽しい、良し、さあ、しまった、ね、な、気に入らない、頭を悩ます、」などである。これらの語彙によって、お互いの感情の交流ができる。例えば、驚嘆する、呼びかける、応答する、挨拶する、むつまじい、愛撫する、反対する、皮肉くる、感受などである。もしも、ゼスチュアをいれれば、その動作とか、表情とかに、さらに、対話が生き生きとする。

3、変化が多いことと簡略性。これらの対話は、即興で臨機応変的に出て、自由に口をついて出る対話である。対話による相方の交流する情報は、明確で、直接的な対話なので、動作と表情と、雰囲気の助けによって与えられる。したがって、言葉の単位は、構成の形式の面で必ずしも完備していないと思われる。言葉と言葉間の文法の繋がりは、標準形ではないのである。その結果、対話は多くの簡単句、省略句及び省略形式の短語、短文である。それと同時に、音声表現言語のイントネーションの変化が幅広い意味を表わすためにとても役立つ。

日本語の教学映画の（片段）一部分を見てみよう。

例1：

母：あなた、今度は、ここで、写真を撮って下さい…

母：照男、信子もいらっしやい。一緒に撮っていただきましょう。

妹：だれか撮って下さると、お父さんも入れるのに。

妹：すみませんが。ちょっとシャッターを押して下さいませんか。

店員：はい。

父：さあ、ここに並んで…

店員：もう少し右に寄ってください。いいですか。撮りますよ。

店員：はい。

妹：どうもありがとう。

妹：今度は、お父さんとお母さん。わたしが撮って上げましょう。

しかし、ここで注意すべきことは、現代劇、映画、漫才中のせりふと作品中の対話は、日常生活対話と同じような感じで、実際は、相当な差違があるのである。いろいろな脚本と作品の中で、対話とせりふは、みんな芝居と作品中の人物の形象を表すためである。それは、人物の身分と性格、思想、感情にぴったりと符合することである。当該の時間、所と情景に似合うことと、真実であることなど、これらの対話は、文芸性がなければならない。漫才は、どちらか言うと、その言葉が全部前段をうけて、後段を展開していかなければならない言葉である。前後が呼応する効果である。

学術報告、論文読みは、話し言葉で発表するか、或いは書いてある通りに読み上げる。読んでいる時、少なくとも、話し言葉で内容を生き生きとさせるために、いろいろな話し言葉が入り混

じる。その語彙、文法、修辞、文章の構成は、文体語と差異はない。

例 2 :

B : 原子とか、素粒子とかという概念を正しく規定するにはどういういいかたをすればよいのでしょうか。

A : その点については、Engels が「自然弁証法」のなかで述べている言葉ほど適切なものは有りません。その一節を読んでみますと、「現代の原子論が以前のあらゆる原子論と区別される点は、物質をたんに不連続だと主張するのではなく（愚物は論外として）、種々な段階の不連続の部分（天体—特体—分子—原子）が普通的物質の質的にことなるさまざまな存在様式を制約する結節点である事を主張するにあるのだといっています。」今世紀にはいつてからの原子物理学の著しい発展の跡を振り返ってみますと原子はけっして物質の可分性の限界ではなく自然を作り上げている質的にことなる無限の階層のひとつとして捕らえるべきであったことがよく分かります。素粒子もいまでこそ物質の窮極であるかのように言われていますが、やはり物質の階層としてとられるのが正しい観点だと思います。[坂田昌一、「新素粒子対話」]より。

この例は、科学技術の対話である作者は、自分で発した問いに自分で答えるレトリックの形式で、文章ががっちりと組み立てられているセンテンスも複雑で、内容の専門性も強調している。専門家でないと、よく理解できない。

もう一種類は雑談式の科学技術の対話がある。使う言葉は、前の例 1 と例 2 の問いの中にある。短文と長文の組み合わせの例は、例 2 が近い。

例 3 :

飯高 : 先生の頃は、平面幾何は、中学でしたか。

小平 : 中学 2 年から 4 年までやりました。

飯高 : 作図問題ですか、中心は。

小平 : いや、証明ですね。あれは、やったほうが良いとおもうんですけどね。

飯高 : どういう理由で、いまの教科書からなくなってしまったのでしょうか。

小平 : どういうわけですかね。僕の滞米中になくなったので、理由はわかりません。

昔われわれは平面幾何で論理を学んだのですが、幾何でないと、論理を教えてもだめなんじゃないかしら。代数なんか素材にして論理を教えようと思っても素材があんまり単純でしょう。もう一つ、人間の脳の左半球と右半球の働きは異なっていて左半球は分析的、右半球は、総合的であるといえますね。言語、論理、計算などは左半球の分担、音楽、パターン認識、幾何などは右半球の分担であるという。そういうことからすれば平面幾何で、論理をおしえれば左右の両半球をお互いに関連させて同時に訓練することになる。殊に証明のための補助線を引くことが、右半球のよい訓練になる。補助線を引くには、図形全体のパターンを眺めて総合的に判断しなければなりませんね。幾何を止めちゃうと左半球ばかり使う事になると思うのですが…（「数学とは、何だろうか」）[小平邦彦「聞き手飯高茂」]より。

商談の特徴は、やはり、例 1 と例 2 の中にある。

例 1 の対話は即興で、センテンスは完全ではないし、言葉使いが適切でないし、言葉には繋がり

がないし、ある時は、話題も中断したり、変わったりする。商談というと、いろいろな準備をしなければならない。内容は正式で、厳密を要する。商談する前には、表敬訪問もあるが、議題に入ると、言葉の使い方を曖昧にしてはいけない。つまり、はっきりしなければならないのである。このような対話は、生き生きとしていないが、論理的で、厳密で、完全的で、できるだけ曖昧な言葉を避ける。公の事は公平に処理しなければならないのである

## (二) 文章表現言語

文章表現言語は、主に文字を通じて、文章形態で表現するのだから、文章表現言語という。

文章表現言語は、その内容によって、文学、政論、科学技術、公文書の四つに分かれる。この文章の中で、文学語と科学技術語の差違について詳しく述べたいと思う。

文学芸術は、決まったイメージで、世の中の人間と物事を描く。その表現の手段は、形象思惟と論理思惟と直覚思惟と音響思惟などを通じて一番大事なのは、形象思惟であり、人物形象、物事の性質などをはっきり人々にその場に身を置いているような気持ちにさせることである。つまり、「そのような人間を見た事があるような感じ」、「そのような声を聞いた事があるような感じ」、あるいは、また、「そのようなことにあったような感じ」などを持たせることである。

例：

天の原ふりさけみればかすがなる。

三笠の山に出でし月かも [ 阿倍仲麻呂 ]より。

作者は、在唐五十余年、この情景が解け合った有名な和歌によって表現し、その書法は、洗練されていて、形象鮮明で、意味深長である。作者は、天、月、山を引き立て役にして、祖国を離れて、他郷にいる人が祖国を熱愛して、祖国を懐かしむ気持ちを生き生きとして描写し、自分の複雑な細い感情を歌い上げた。

詩歌であるから、リズムが明らかで、日本の詩歌の韻律を表しているのである。

リズムと韻律の音響思惟の存在は、詩歌だけでなく、他の形式の古今文学作品にも存在する。

また、「この年も花ちり、若葉が伸び、五月に入った。」(「延びる滑走線」中本たかる)。これは、小説のはじめである。作者は、リズムカルで鮮明的な直覚で、読者を小説の本題に引き入れる。

文学作品の形象性を表すために、積極的で、消極的で、簡潔に練れて、意味深長で、豊富で、新奇ないろいろな修辞手段を使わなければならない。

例：

やせて、はい骨のような、そして険しい目つきのじいさんが山高をあみだにかむり、片手に竹の棒を握って、崖の下へやってきた。[ 黒島伝治、「豚群」]より。

この作者は、生き生きとした言葉で、積極的な修辞手段で、凶悪で陰険な形象を見事に描きあげた。

上の例から見れば、文学作品は単語と言葉の応用が、大量に、感情色彩と描写色彩の言語成分をつかっている。また、音声表現言語からいろいろな言語素材を取り入れている。語彙の広範性

と通用性は、すべて文学文体の特徴である。

文法面での変化は、多種多様である。作品中、簡単句、複合句を多く使っている。もちろん、長い文も用いた描写は、文学作品ではよく使う手法である。したがって、限定語、状況語が多く出てくる不完全な文も、珍しくない。例えば、一面の雪の中に、ぽつんと一軒、小さなあばらや、家の後ろには、赤い赤い夕焼け空が、いっぱい [木下順二、(歌劇「ゆうづる」)]より。などである。

科学技術の文体は、文学文体とは異なる。科学技術文章の作用は、科学技術の知識を普及させるために、物事の道理をよくわかるように、はっきり述べて結論を提出し、定理と定律と公式、分子式を総括することである。これは、一つ一つの考えにがっちりと組み立てられている論拠を提出しなければならない。特に、論理的に推理の過程を強調しなければならない。分析と総合は、科学技術文章を書くことに対しては、とても重要なことである。分析と総合の中で、必ず筋道がよく立って、段落がはっきりして、物事の内在の関係を把握しなければならない。すべての思惟結果を正確に、わかるように、科学技術の文章の中で、表すようにしなければならない。このようにしたいと思うならば、必ず抽象的な概括と高度な論理思惟を用いなければならない。

科学技術文章の特徴は：

1、正確性。客観的物事を反映するとき、科学技術文章は、大量に専門用語を使う。正確な専門用語を厳しく選ばなければならない。できるだけ、概念が、混乱と概念がはっきりしないものは避ける。単語を間違えて使ったら、異なった意味となる可能性がある。他の言葉の選択も同じように精確である必要がある。

科学技術文章は、客観的な物事を反映するのだから、言葉の使い方は、感情色彩とロマンチックな言い方を使わないで、嘘、偽りのない、誇張しないで、しかも、省略しないように記述しなければならない。

2、文章ががっちりと組み立つこと。科学技術は、客観物事の複雑な関係を反映するために、論証ががっちりと組み立てられて、構成は厳密で、論理が強くなければならない。

3、簡潔性。科学領域の中に思惟のもっとも重要な形式は概念である。思惟活動の言葉の体現は、正しく理論の順序中の判断と推論することである。だから、文法面の構成は厳密だけでなく、文章は、簡潔にしなければならない。

最近、ある人が、科学技術文章に中の「必要であるといえる」「必要であるといえないこともない」等は、「必要である」に簡略化するようにと提案した。

4、平易性。科学技術文章の文体は、物語と趣味を追い求めない、それは、生き生きとしての形象で表されない物事も本質を揭示と概括することが自らのつとめとなるのである。だから、文体は、平易で、まじめで、慎重でなければならない。修辞の面でも、積極的に修辞を使わないようにして、誇大に表現しないことである。次に例を示す。

例：

熱力学第一法則は、次のように表すことができる。即ち「力学的エネルギーが熱エネルギーに変化した場合、もしくは、熱エネルギーが力学的エネルギーに変化した場合、両者間のエネルギー

一の換算を行えば、一方で、消化したエネルギーと他方で生じたエネルギーは、相等しい。

熱エネルギーと力学エネルギーの交換は、1 カロリー=4.2 ジュールとすればよい。ある物質系が外部から熱量Q「カロリー」と仕事W「ジュール」を受け、それによって物質系の内部エネルギーが  $U_1$  の状態から  $U_2$  に変化したとすれば、熱力学第一法則は、

$$4.2Q + W = U_2 - U_1$$

と表すことができる。

以上、二つ種類の文体の比較してみれば、文学文体的表現は、高度な形象化である。科学技術の文体の表現は、言葉の正確さと明瞭に述べる論理性である。

### 三、各種科学技術文章体の差違

文学について言えば叙事文学、叙情文学、劇文学などに分類されている。科学技術論文などは、叙事文学に属している。

文学作品については、普通小説、詩歌、散文、報告文学、雑文、脚本、文芸評論などである。科学技術の文章は、

- 1、研究の論文（科学論文、技術論文）。
- 2、説明書（工業設備の総合的技術仕様書、材料及び物品化、仕様書、建築工事仕様書、工事施工仕事書、工事明細設計仕様書、取り扱い、保守点検要領書など）。
- 3、契約（契約、受配電及び通信設備プラント設備契約、付属書）。
- 4、技術の操作規程。
- 5、学術報告（総説、展望、動向、論説）。
- 6、実験報告、試験法。
- 7、専著、教科書、講座。
- 8、特許。
- 9、技術資料。
- 10、質量の管理。
- 11、専門的な百科全書など。

形式は、内容を決める。文章の内容は、違うと文章の形式も変わる。文章をかく手法は、一般に議論文、説明文、記述文などに分かれる。科学技術文章もいろいろな形式がある。例えば、科学技術論文は、「論」を主として、実験試験報告は、記述を主として、機電の技術規格、構成などの資料は、説明を主として、学術報告は、説明と議論の間で、教科書は、よく兼ね備える。

以上の形式を反映するいろんな科学技術文章は、その文章の書き方は、文学作品より、ずっと固定する。しかし、その中の差違がやはり存在する。科学技術論文は、文章の各部分の構成と文字の使い方の要求は、決まった野である。特定の科学技術の領域は、大体、標準てきな文章の書き方を規定する。細い点は、その目が、通常では、簡潔な前書きで始める。

論文を書く目的は、はっきりしなければならない。それから、具体的な内容を書くのである。もし、論文は、テストに関連したら、検定の性質、実施条件、過程、テストの結果をはっきりか

かなければならない。そのため、日本の田中義磨は、「論文の基本的形式を提出した。即ち、論題—著者名—目次—緒論—研究史—材料研究—実験成績—議論—結論—文献—版図説明—付録—版図—謝辞。

次の構成を見よう。それは、アメリカ協会が、規定されるのである。両方を比べて見ると、意見や理解が、はからずも一致している。

研究報告の編成：

表紙

扉

摘要

前書き

緒論

理論：実験の方法と結果（小さい見出しを付け加える）

討論

結論

謝辞

参考文献

付録（表、挿し絵、座標図）（文章の後と文章の中に付け加え手もいい。）

現在では、権威がある雑誌の正文前に英語の摘要を書かなければならない。一つの簡単ではつきりしている摘要は、読者に文章の成果を掲示できる。読者は、全文をざっと目の通すかどうか、決めることに便利になる。文章の終わりに、参考文献を羅列するのが、欠くことができない。それが、作者は、問題を詳細に研究する根拠だけでなく、作者は、他人の功績をかすめ取らない。厳密な科学態度でもある。結論の部分は、文章の鍵である。だから。必ず精確で平易であって、はっきりと簡明に書く。

以上は、わりあい全面的な論文の書く形式である。具体的に、どのように書くか、状況によって、縮減できたり、順番も逆にしたりしてもよい。

次は契約の書き方である。受配電と通信、プラントの契約の例を挙げよう。

#### 受配電通信設備プラント設備契約

（契約番号：x x x）

#### 付属書目次

- 付属書 1 生産能力及び生産品種
- 付属書 2 乙が供給する設備と材料の範囲及び技術仕様
- 付属書 3 甲の供給範囲
- 付属書 4 甲乙双方それぞれの設計分担範囲
- 付属書 5 乙が提供する設計技術資料の範囲
- 付属書 6 甲が乙に提供する設計条件及び技術資料
- 付属書 7 乙の保証指標と検定方法

付属書8 乙が提供する技術ノウハウと特許技術

付属書9 工場出荷前検査

付属書10 契約工場のレイアウト

付属書11 契約工場の設計と設備の引き渡しスケジュール

付属書12 甲の技術実習訓練及び乙の技術者の派遣(別冊)

付属書13 甲の銀行保証状の様式(別冊)

付属書14 乙の銀行保証状の様式(別冊)

付属書15 設備と材料の価格内訳表(別冊)

付属書16 x x x P C M 3 0 方式設備機器仕様書(別冊)

最終に特許の書き方についての説明である。特許の文の内容は、国によって違う。米国は、発明された物にとっても詳しく書くのである。イギリスは、一般的な簡単な紹介である、ドイツは、特許公式を編成するとき、新しい物事の基本要素のほかに、発明の実質を書く必要がある。特許の書き方の規定項目は、変わらない。例えば日本の「特許公報」は同じように題名、発明項目、人事項目、正文という部分で構成する。正文は、「図面、図面簡単説明、発明簡単説明、発明詳細説明、特許請求範囲などの部分から、構成する。

科学技術文章でも、その書き方は、いろいろあることが分かった。

#### 四、むすび

音声表現言語と文章表現言語の相違は、

音声表現言語においては、その言語行為の行われる場合の条件がその行為を規定する。

文章表現言語においては、論理性などの適確さが求められるなどの特徴に支配される傾向がある。

そうした特徴を事例研究を集積し、明らかにして、行きたい。

#### 文 献

- (1) 坂田昌一、「新素粒子対話」。
- (2) 黒島伝治、「豚群」。
- (3) 木下順二、「歌劇「ゆうづる」」。

(平成12年12月8日受理)